

## チクタク おもちやばこ

\*\*\*\*\*

カチコチ、カチコチ

大きな古時計が動いてる。

チクタク、チクタク

大きな振り子を、のんびりゆらして。

コチ、コチ、コチ、コチ

いっぱいの時計に囲まれて、わたしはぼおっと考えていた。

咲とおおぞらの木で再会して、もうすぐ1年なんだな

コッ、コッ、コッ、コッ

時計の郷さとから帰ってきて、もう1週間だし。みんな

なみんな、早いなあ

「ムプー」

ムープの声が近くから聞こえる。どうしたのかな、いつもよりおっきな声。おっきな まあ。

「おっきいわねえ、ムープ でも、なんでそんなにおっきいの？」

見上げたわたしの目の前で、ムープのおっきなおなが揺れていた

\*\*\*\*\*

ポーン

時報の音で、はっとした。

ここは時計の郷なんかじゃない。時計やさんの、柱時計の前だわ。わたし、咲と待ち合わせしてて、してて

「いつけない」

この間は、これずっと見てて失敗しちゃったんじゃない。また同じことしそうになるなんて。

あゝあ、成長してないなあ、わたしも。

「あ、舞。やーっぱここにいた」

背中から聞こえてきた声に、私はおもわずびくつとなつちやっただ。

振り向いた先に、咲の顔。でも

「どう？ まだ見てく？」

でも、もう咲はいきなり怒ったりしない。

「ごめん。すぐ行くわ」

わたしは、奥のおじさんに声をかけて、そのまま時計やさんを出た。

そのあいだじゅう、咲はちよつと苦笑いしながら待ってくれてる。怒る前に、ひと呼吸するようになつたみたい。成長してるのよね。

古いとびらを開けて、正面に見えるのは小さな公園と大きな時計、その向こうには澄んだ冬の空。すうつ

と吸い込まれちゃいそうな寒空に照らされてたら、つい、言葉がこぼれてきちゃった。

「なんだか　　なんだかなあ」

\*\*\*\*\*

あ　　ちよつと前までは、もつと暖あつたかかったんだけどな

時計屋さん出て、セーターのすそなおしながら、あたしはそんなことを考えてた。

頭の上には青くて寒そうな空。ゆっくり目をおろしたら、ちっちゃい公園に大きな時計。

「予定は4分オーバー、か」

しょうがないや。また裏の川を越えて近道しようとして、いけないいけない。これだからマズいんだよねえ、あたし。

「普通に行こつか、ふつーにね」

小さなバッグを肩にかけなおしながら、あたしは

背中の舞に声かけて歩き出した。

町の大きな広場に行くのは、カラオケ大会以来か。たいして遠くないんだけど、ああいうイベントやってないとあまり行かないな。舞も、絵の題材にならないらしくて行かないみたいだし

そこまで考えて、ちらつことなりを見てみた。舞はさつきから黙ったまんま。あたし、またへんなことやっちゃったのかなあ？

いや、時計の郷に行つてからずっと、か。学校でも行き帰りでも、なんとなくだけで、遠慮して感じがするんだよね。

ひとのことが言えないか。あたしもそう。なんかやろつとしても舞が目に入ると、ちょっと止まっちゃう。

もう、あんなことになりたくないから、なんだけどね。でもなあ、このまんまだと、ちょっと疲れちゃうよね

「咲？」

「え？あ、ど、どうかした？」

「やっぱ、なんか、マズいことやっちゃったかな」

「ううん　もう、ついてるんだけど」

「へ？」

言われて見てみた足元に、広場入り口のポールが見えた。

\*\*\*\*\*

「うわあ」

広場の中を見たとき、わたし思わず声に出しちゃったわ。

広場の端っこ、この前は屋台が出てたところに、咲のお店のよりちょっと大き目のバン。その前に並んでるパラソルつきの丸テーブルに、女の子がいっぱいいるんだもの。

「あ、咲だ。おい」

バンの前では、同じクラスの仁美ちゃんがこっち向いて手を振ってるし。

「おそーい！ もう空いてる席、ひとつだけだよ」

奥の方から聞こえた声は、たしかソフト部のキャプテンさん。これ、ひよっとして

「みんな、知り合いばかり？」

見回してみたけれど、みんな見たことのある顔ばかり。まるで、学校が広場に移動してきたみたい。

「そりゃそうだよ。情報流したの、篠原先生だもん」

一番奥にひとつだけあいているパラソルに、咲が歩いていこうとした。ひよいっと出てくる手が、わたしの手首に あら？

ちらつ、と視線を感じたとおもったら、手がぱつ、と引っ込んだ。

「さ、さあ。奥だよ」

なんだろう。なんか、ちょっと、へん。

そんなもやっとしたの感じたけど、わたしはまた咲のあとをついていった。

いつも、背中を見てるなあ、なんてちょっと思いながら。

\*\*\*\*\*

「いらっしやいませ」

ふたりして席に着いて、そのまま黙ってメニューを見てたわたしたちのところに、女の子の音が響いてきた。

すうっと通る、とってもきれいな声。

「あ、ええと…あら？」

メニューから上げた目に飛び込んできたのは、明るい髪のおさげ。白いエプロンの胸に大きなお盆を抱えた女の子。と思ったらそうじゃないわ。お盆より、からだの方が小さいんだ。ほんとに、ずいぶんちっちゃい

「店員、さん？」

へんな声になっちゃって、思わず両手で口ふさい

だけど、

「はい」

って笑顔がかえってきた。

「そうそう。このひとがお手伝いしてるから、行ってやって、ってことで来たんだよ、舞」

テーブルの向かいに座った咲が、両手で頬づえついてこつちを見るわ。なんだか楽しそつににっこ、ちよつとほつとするな。

それにしても、ほんとうにちっちゃい。わたしより小さい店員さんなんて

「あの、失礼だったらごめんさい。あなた」

「中学2年です」

明るい髪をびよこん、と上げて、彼女が応えた。いたずらっぽい顔は、舌が出てこないのが不思議なくらい。

「ええっ!?!」

今度は口を手でおさえるひまもなかったわ。けど、もつとびっくりしたのは、

「あたしたちと同じ!?!」

って、となりでも飛び上がったこと。

「咲も知らなかったの?」

「うん。行ってやって、って言ってた人が高1だっというから、てっきりそのくらいだと思ってた」

はあ。あらためて女の子を見たら、ついためいきがでちゃったわ。あたしたちと同じ歳なのに、もう働いてるんだ

「すごいなあ。あたしなんか、うちの手伝いもあんまりしないのに」

「私は　私はただ、このお店が好きなだけですから。好きっていうだけで、ずっと働いてるだけですから」

好き、かあ

わたしには、そういうのってないな。絵を描くのは好きだけど、それはそれだけ。だれかのためになること、なんてしてないわ。

「篠原先生がさ、ラクロス部の助っ人に行ったとき

に聞いたらしいんだよ。友だちが手伝ってる店が移動販売でこっち来るから、寄ってあげてよって」

「それって、咲の知ってる人なの？」

「んー、あたしは会ったことないけど、結構有名なよ。県内でラククロスやってる子なら誰でも知ってるんだって。美墨<sup>みすみ</sup>先輩<sup>せんぱい</sup>って言ったなら」

「わあ、そうなんですか♡」

「うわっ！」

わたし、おもわずのけ反り<sup>ぞ</sup>そうになっちゃった。目の前で花が咲いたみたいに、ものすっごい笑顔になるんだもん。

「あ、あの ほかに、なにが言ってませんでしたか？」

ぐいっ、って音がしそうなくらい、テーブルにからだ乗り出しちゃって、さっきのおとなしそうな印象とちよっとちがうわ。よっぼど、その先輩のことが好きなのね。

「うーん ちよっとゆっくりめだけど、のんびり

見てやって、とか」

あ、あはは。咲ったら、気づいてないのかしら？それって遠まわしに『仕事が遅い』って言ってるようなものじゃない。

「咲い、それ」

あ、あら？ フォローしようとおもって口を開いたのに、途中で止まっちゃった。

どうしたんだろう？。そこから先の言葉が、口から出てこない

「あ、いいんです。ホントのことですし なぎささんなら、言いそっだし」

ぺろっ、と舌だして苦笑いしてる彼女、なんだかとっても自然で、きれい。先輩っていうより、ともだちなのかな。

ともだち、かあ

あれ？

ちよっとぼーっとしていたわたしの耳に、きゃあっ

て声が聞こえてきた。

「なに？」

咲も声の先を探してる　あ、なにか動いてるみたい。騒いでるテーブルの向こうに、なにか、頭？  
みたいなのが、ぴよこん、ぴよこん、つて。

「ええと　きつと、弟です。」

まだ本当に『お手伝い』なんですけど、そこがなんだか、女の子に受けてるみたいで　「

咲とふたりで、ぱつと見上げたら、店員さんの声がどんどんちゅちゅくなつていった。なんだか、照れてるみたい。

「そ、そうだ。おみずがまだでしたよね。すぐ持つてきますから」

真つすぐバンに駆けてく女の子の向こうで、また頭がびよこびよこ。

わたしは、咲と顔見合わせて、おもわず吹き出しちゃった。

なんだか、きょう初めて笑えた気がするわ。

\*\*\*\*\*

「あたしは　やっぱカレーかな」

メニユーから目を上げた瞬間、舞と目が合った。

「じゃあ、わたしも」

言つてすぐまたメニユーに目が戻つてるけど、その前にちよつと困つたみたいな顔してた感じ。さっきは一緒に笑つたのに、なんだらうなあ、これ。

「お待たせしました。おみずです」

舞の顔を覗き込もうかな、と思つたところに、さっきの声。あの店員さんが、大きなお盆を器用に持つてコップ置いてくれるよ。あたしの前にひとつ、舞の前にもひとつ

「ムブー　」

んんっ？

「あら？　いま、なにか音が　」

なに？って声の方見てみたら　うわーっ！舞  
のカバンからムーブが出てきてるっ!!

「な、なんでしょ。聞こえませんか？」

あわててカバン押さえようとしてる舞と店員さん  
の間に、あたしは無理して割り込んだ。

「ま〜いい〜」

あっちゃあ、フープまで出てきてるよ。ちょっと  
どおすりゃいいの、これっ!!

「ムーブ、フープ、隠れてっ！」

舞がまだ必死になってカバンに詰め込んでるけど、  
なかなか思ったように行かないみたいだよ。ああ、ど  
うしょ。

「？でも、たしかいま、ポルンみたいな声が」

うわーっ、うわーっ、うわわーっ！　なによ、ポ  
ルンって。おもちゃ？　フープたちをおもちゃの声  
と勘違いしてるの？

「ムーブっ!!」

ああっ、て、店員さんに飛びついちゃった!!　ヤ

バっっ!!

って、あれ？　なんだろ、この店員さん。ム  
ブ抱きかかえて、にっこり笑ってる？

「まあ、ポルンみたいでかわいい♡　　あら？　で  
も、この子」

うわわわわーっ!!　バレちゃうっ!!

「ひかりーっ！　話し込んでないで、次のお客さ  
ん！」

いきなり遠くから、すっごい大きな声。バンにい  
る店長さんかな。でも、これは

「あ、はーい！　えっと」

しめた！

「あたしたちは、カレーふたつ。忙しいんでしょ？  
行つてきなよ！」

はあ、はあ。ひと息で言い切ったよ。さあ、これ  
なら

「ごめんなさい。捕まえちゃって。　それじゃ」

店員さん、ムーブをテーブルに置きながらぺこっ、っ



て頭下げて、そのまま車の方に走っていった　ふう。  
たすかったあ。

「こあら、ムーブ！　ダメじゃない、出てきたりし  
ちゃ」

まわりに誰もいないの確かめてから、あたしはテ  
ブルの上をジロっ、と見つめた。けど、ムーブは上  
向いて目つぶってるよ。まったく、もう。

「しょうがないフブ　ムーブはちよつと食べすぎ  
フブ。しばらく、そこで休ませてフブ　」

声したのは、舞のカバン。フブが頭だけちょ  
こつ、と出してる。

食べすぎ　食べすぎ、ねえ。月の光たべてる、っ  
て言って、こここのころ毎晩月見るとか聞いたけ  
ど　舞のここは望遠鏡もあるし、食べ放題ってこ  
とかな。ま、しょーがない。それならあたしたちも  
しっかり食べるとしましょっか。

に、しても。

「混んでるなあ　」

バンの前、さっきの女の子が走り回ってる。

ちっちゃな弟さんまで、おぼん持ってあっちへこっ

ちへ。人気なのはいいけど、人が足りてないみたい。

「よし、ちょうどいいや。あたし、バンまでカレ  
ー取りに行つて来るわ」

「え!？」

舞が驚いた顔であたしを見る。けど、そのまま  
あたしは席を立った。

「だつてさ、あの子がカレー運んで来たとき、また  
ムーブがさわいじゃつたら大変じゃない。じゃ、ム  
ブとフブ、よろしくね」

ばーっ、とまくし立ててながらテーブルから離れる  
あたしに、舞がなにか言おうとしてる。だけど

ごめんね、舞。

「落ち着かなきゃ。これじゃまたケンカしちゃうよ」  
バンに向かって早足で歩いてく途中、気づいたら  
あたし、胸にぎゅつと手を当ててた

\*\*\*\*\*

咲がバンの前にまで行ってから、わたしはなんとなくテーブルの上に目をやった。

わたしにだってわかるのよ。ムープ、調子わるそうだし、ふたりともいなくなっちゃいけない、って。

「ムープ

ほんとに、調子わるそう。このあとの予定もあつたけど、食べ終わったら帰ったほうがいいかもしれないわね。

「あゝあ、咲がまたぐちぐち言いそう」

ダメだなあ。こんなこと考えるよつじや。またケンカしちゃう

ああ、まただわ。あれから、咲から離れてひとりになると、つい考えちゃう。

あのとき、時計の郷で迷路から抜け出したあのとき、

わたしが思わず扉に飛び込んでいったとき、咲はすつごく喜んでくれた。けど

「1年、経つのになあ」

そう、1年も経つのに　わたしだけ、ちょっと、ほんのちよつとただけけど、みんなと違う場所にいる気がする。

「咲は、わたしと同じ場所にいるわ。けど」

文化祭のオブジェを作っても、みんなの絵を描いても、たまに、ほんとにたまーにだけどわかる。『なぜ、ここにいるの？』っていう視線があること。

「わたし、咲になにをしてあげたのかな？」  
なにができたのかな、わたしに？

わたしの周りは、こんなに明るいのに　え？ 明るい？

はっとして周りを見回したら、気のせいじゃなかった。

「な、なにこれ。テーブルが、光ってる？」

その瞬間、ぱあつ、と目の前が光で満ちた。

お日さまのでも、蛍光灯のでもない、少し冷たくて澄んだ——まるで、月の光。ムーブ？

「痛っ！」

いたたた　ムーブったら、いきなり光るんだもの。びっくりしてイスから落ちちゃったじゃない。いくら月の精だからって　あら？

なんか、へん、よね？　まっ平らかな木の上なんて、あの広場にあるはずないし、だいたい、さっきまで座っていたイスもないし

「ここ、いったいどこ？」

「ムーブ」

ムーブの声だわ。さっきと違って、落ち着いてる。いつもの声。

でも、おかしいな。なんだかとても近くに聞こえるし、おっきい声　ちよつと、まっつて。

「ムーブ？　え、えええっつ!!」

顔は3回つねった。うでだって何回も叩いてみたい。

痛いわ！　なのに、目が覚めないじゃない!!

「ムーブ、なんでそんなにおっきいのよあつ!!」

\*\*\*\*\*

「お待たせっつ!!　って、あれ？」

両手にカレーのおさら持って、咲がテーブルに戻ってきた。

「なんだ、いないじゃん」

いますっつてば。

「おーい、どこいったー？」

もう、ぜんぜん違うところ向かって呼びかけてるわ。まあ、仕方ないんですけど　それじゃ、思いっきり息吸って、せえ、の！

「ここよーっ！」

「ん？　なんか聞こえたな？」

なんか、って　ちよつとお。

「舞、どこよ？ 隠れてないで出てきて。せつかくあつあつのカレー持って来たってのに、冷めちゃうじゃないさ」

隠れてなんかないわよっ！

「ここだってばーっつ！！」

「おつかしいなあ　トイレかな？」

もう、これだけ呼んでも聞こえないなんて　よお

し、こうなったら！

「しょうがないなあ。　ひとくちだけ、先に食べ

ちゃおっか」

まったく、いやしいんだから　よい、しょつと。

「いっただつきまー　あれ？ スプーンが、なん

か、重い　って、ええっ!？」

目の前に、おつきな顔。その目が真っすぐ前を見つめてる。スプーンの上の、わたしを。

「咲、ほら、わたしよ、わたしっ!!」

ぱく

え？

ぱく、ぱく、ぱく

ちよ、ちよ、ちよつと!？」

「あ、あ、あし、足！そこ足っ!! 食べないでよ、咲いっつ!!」

「ま　い!？」

ぼおつとした瞳がふたつ、真正面。乗ってるスプーンがゆらゆらゆれて、まるで目の前の瞳が宙に浮かんでるみたい。

「う、うそ　まい　ほんとに舞なのおっ!？」

大声と一緒に揺れるスプーンに、わたしは必死につかまった。なのに　なぜかなあ。

しがみついているスプーンの上で、なんだかわたし、ちよつとだけほつとしてるわ——

\*\*\*\*\*

「さあ〜きい〜?」

舞を見つめて固まっちゃったあたしの背中から、なんかイヤな声が聞こえてきた。

とっさにスプーン抱えながら振り返ったら、すぐ目の前に仁美と優子。それもなんだか、むすって顔して。

「な、なによ」

とりあえず答えてはみたけど、

「まゝた舞ちゃん怒らせちゃったわけ?」

仁美がじとっ、て目であたしにらんでるけど、あたしはそれより、手のあたりでもぞもぞ動いてる方が気になってた。

「え、と」

「もう、なにやっつてんのよ。なんかギクシヤクしてるから、ってこの場所用意したの、誰だと思ってるの?」

ああ、なんとかセーターの下にもぐりこんだみたい。とりあえず、一安心かな。って、仁美、いまなに言ってた?

「ちよ、ちよっと?」

「なによ、もう。喫茶店でふたりきりじゃ、なんて言って」

わーっ! わーっ! わあーっ!!

「待ってっつてば! 舞に聞こえちゃうじゃん!!」

口に出した瞬間、しまった! って口おさえたけど遅かった。

「へ?」

「なに言ってるの? どこにもいないじゃない」

きよるきよる、あちこち探してるよ。おなかの舞も息苦しいのが、セーター持ち上げてるし、ああ、これじゃみつかつちゃうかも。っ!

「あの」

へ?

急に聞こえてきた声のほう向いたら、おぼん持っ

た店員さんが立ってた。

\*\*\*\*\*

「えっと、おみずのおかわり持ってきたんですけれど、どうかしたんですか？」

ぼかん、って顔は、三人で一斉にふりむいちゃったせいか。でも助かったあ。優子たち、自分たちのテーブルに戻っていつてくれたもんね。　　なんか、不満そうだけど。

「あら？」

って、いけね。まだひとりいたんだっけ。　　あれ、なんだろ？照れたみたいに笑いながら、あたしのおなか見てる？

「ごめんなさい、気がつかなくて。取り替えてきますね」

そう言って店員さん、明るい色のおさげ揺らしながら、バンの方に戻ってくよ。お水持ったまんま。

「なんだったんだろ、あれ？」

ぱたぱた走って行く店員さんを目で追ってたら、あたしのセーターのすそが、ぼこん、と持ち上がった。

「ねえ、咲」

「なに？」

やばい、つい、顔がひきつっちゃうよ。な、なに言われるか

「わたしのカバンから、道具を出してくれない？メモ帳と、鉛筆だけでいいんだけど」

へ？

てつきり、なにか言ってくると思ってたのに

まあ、いいや。

あたしはスプーンをその場において、舞のカバンを開けた。ハンカチをふとんがわりにして寝てるムーブを起こさないように、そおっとつまんでく。メモ帳と、筆入れ　と、フープ。ん？

「なんでついてくんの、フープ？」

「いいわよ、咲。メモ帳の白いページ開いて、置いてくれる？あと、鉛筆は咲の手のひらに置いてね」

まあ、舞がそう言うならいいけど。さっきの様子だと、また店員さん来るよねえ。こんどはどうやってごまかそっかな。

「よい、しよつと」

そんなこと考えてたら、目の前で鉛筆が立ち上がった。

「ほえ」

いつの間にか、あたしの手のひらに移った舞が、肩と腕で鉛筆支えてるんだ。目の前で動いていってる鉛筆に、あたしは思わずため息ついちゃったよ。

「もうちょっと前、おねがい」

あ、ああ、いけない。メモ帳から遠すぎるんだ。

あたしが手をメモ帳の近くに方に動かしたら、鉛筆が細かく動きだした。舞がなにか描き始めてるんだね。さっすが。器用なもんだなあ。

ぴよこん

ん？

ぴよこん、ぴよこん

あたしの手の上で、髪の毛が鉛筆と一緒に踊ってる。まるで、おもちゃの人形みたいに。

ぴよこん、ぴよこん、ぴよこん

上から見ると、そこだけ目立ってて、なんとなく、さわりたくなつて

「なに？」

くるつ、と頭だけ上を向いた舞の前で、あたしの顔がひきつった。

「え？いや、なんか、気持ちよさそう」

ちよつとだけ、ほんとに人形みたいな目をしてから、ちっちゃな頭が前向いた。

「小学校のころは、よく引つ張られたわ。

でもずっとこの髪型にしてたら、なんだかトレー  
ドマークになっちゃって。もう他の髪型にはできな  
いなあ」

ちっちゃなからだから、舞の音が聞こえてくる

あれ、なんだろ、この感じ。

「そっか、舞の髪は、歴史があるんだ」

「そう？でも、むかし会ったときもその髪型だった  
と思っただけ」

おおぞらの木で会ったときのこと、覚えてるんだ

——ああ、そっか。

「あたしは、ソフトやんのにジャマだから、すぐバッ  
サリやつちやうだけ。昔から、ずっとだよ」

これ、舞なんだ。人形に見えても、どんな格好でも、  
たとえおもちゃ箱に入ってたって、舞は舞なんだ。

なんで、忘れちゃってたんだろ、こんな当た  
り前のことをや。

「ねえ、舞」

ちっちゃな後姿みながら、あたしがつぶやいたけど、

「」

手の上からは、なーんにも答えが返ってこなかっ  
た。まあ、いつものことなんだけど。

「なに、描いてるの？」

こっそり覗き込んだけど、舞ったら前かがみになっ  
て見せてくれないや。しょうがない、だったら脇の

ほうから あ、ヤバ。

「舞、ごめん。ちょっと、トイレ行きたいんだけど」

「うん」

『うん』じゃなくて！

「だから、ト・イ・レ！」

「え？ あ、ああ、トイレね、トイレ。わかつた  
わ。テーブルの上に置いてくれる？」

鉛筆といっしょに、ゆっくり降ろしてあげたら、筆  
入れをいす代わりにしてまた描きはじめたよ。まっ  
たく、

「のんきだなあ、舞は。このままだったらどうする  
つもりよ？」



「なんかね、全然あせる気にならないの。どつしちゃうたのかしら、わたし」

みんなのテーブルから舞の姿が隠れるようにカバン置いて立ち上がって、テーブルを見たらやつぱり楽しそうに描いてる。

「ホント、舞だよね」

はあ、ってついたため息が、公園に来る前より、ちよつとだけ軽くなつた気がした。

\*\*\*\*\*

「さあきいゝ　って、あれ、いない？」

咲が席を立ててしばらくしてから、声が聞こえてきた。

わたしはとつさに筆入れに潜りこんで、しばらくじつとしてたけど、

「なんだ、やつぱは舞ちゃんもいないじゃない。はあ、しょうがないなあ」

どうやら、気づかれなかったみたい。ふう。

筆入れのチャックのすき間から外を覗いてみたら、来てたのはソフト部のキャプテンさんだわ。あ、

咲の席の背もたれに腰かけちゃった。

「咲のやつ　喫茶店じゃかしこまっちゃうから、なんて言うから、篠原先生のツテまで使って、別の街からおいしい屋台呼び出したってのに。

ったくもつ、初デートのカップルが、ってのよん？」

あつ!?

置きっぱなしにしてたわたしのメモ帳、キャプテンさんが手にとつて　すっごいため息ついちゃった。「ソフト部のみんなと、ちよつと離れたとこに舞ちゃん　これだもんなあ。

だいたい、ひとりじめしすぎなのよ、咲は。わかつてんのかなあ　」

ほりほり、頭かきながら空みあげてるキャプテン

さん、なんだか、すごく心配そうに見える

「ひとりじめ　？」

思わず、わたしは口を開いちゃった。

「そう！舞ちゃんのいると、すぐ咲が行くでしょ？あれじゃ、他の子が遠慮しちゃって、舞ちゃんに話しかけづらいじゃない？」

それじゃ、わたし

「みんなの仲間に、なってる　？」

「なあくに言ってるの。あたしは舞ちゃんのためだから、できるだけ来て、ってひと声かけただけよ。なのに、結局全員来ちゃってるじゃない。あんただって、舞ちゃんが心配だから来たんでしょ　あ、あれ？」

いつけない。つい声が大きくなっちゃってたんだわ。

「　いまの、だれ？」

キャプテンさんが、きょろきょろ見回してる。ど  
どつしめう

「はい？」

筆入れの中で息を止めてたわたしの耳に、別の声  
が聞こえてきた。そおと外を覗いてみたら、あの  
明るいおさげ髪が揺れてるわ。

「いまの　あなた？」

「わたし、たったいまおみず持ってきたとこですけ  
ど　どうかしたんですか？」

きよとん、とした顔で首をかしげてる店員さんを  
不思議そうに見ながら、キャプテンさんが席に戻っ  
ていった。

それにしてもさつきといい、今といい、タイミン  
グすっごくいいわね。

それにすっごく仕事熱心だわ。びつくりしちゃう  
くらい。だって、だれもない机に、丁寧ていねいにお冷やの  
コップが並んでいくんだもの。ひとつ、もうひとつ  
あら？

「サイズ、合うといいんですけど」

筆入れの近くに置かれたの、これって、コーヒ  
ーのミルク入れよね。いまのわたしが、ちょうど腰か

けられるくらい大きさの。

「探したんですけど、一番小さいのがこれなんです。それじゃ、ごゆっくり」

につこり笑いながら車の方に戻って、店員さんを、わたしはあっけにとられながら見つめてた。

「まさか まさか、ね」

筆入れの中で、わたしはちよつとだけ汗かいてた。

真冬なのに。

\*\*\*\*\*

「舞、まーい。もう周りに人いない？」

コンコン、って音と一緒に筆入れが揺れた。わたしが首を出して見回して、

「咲？ いないわよ」

って答えたら、テーブルの下から栗色の頭が上ってきたわ。視線だけ、じいっとわたしと合わせながら。

「で？ なにか言いたいこと、あるんでしょ？」

もう。真つ赤な顔して言うもんだから、かえってキャプテンさんの話、思い出しちゃうじゃない。

「っっ、べ、べつに？」

思わず吹き出しちゃったわたしに、両手広げた咲が近づいてきたわ。

「くすくす笑ってんじゃないわよ。ったく、ちび舞のくせにっ！」

あはは。

声はどなってるのに、手で追いかけられてるのに、

すっごく楽しい。なんだか、ずいぶん久しぶりの感じ

「きゃー！」

「フプっ！！」

なにか柔らかいものに全身でぶつかっちゃった。けど、『フプっ』ってことは

「フプっ、フプププっ」

はっとして、柔らかいものから離れた。目の前には、筆入れの脇にフープのおっきなからだ。なんだか、おなかが揺れて

「フ、フ フブ〜っ!!」

逃げなくちゃ! って思ったときには、わたしのからだは宙に浮いていた。

やっぱり、風の精よね。ふわふわ浮きっぱなしでうぶっ!

「痛った〜っ!!」

また柔らかいものに押し付けられたと思ったら、咲のおっきな声が響いた。

目を開けると、すぐそこに咲の顔。ちょっとずらすと、テーブルの上に鉛筆。手を伸ばせば、すぐ持てる。もう、肩を使わなくても描けるわ。

「やっぱり、おっき方がいい♡」

目を合わせてなんて、しばらくぶりに笑った気がする。咲といっしょに、いっしょの気持ちで笑える。これで、いいのかもしれないな

「その」

あれ? なんだか、別の視線が来てるみたい?

声のほうを向いてみたら、また店員さんの女の子。すっごく困った顔でわたしを うん、わたしたちを見てみたい。どうしたのかな?

——って、ちょっと待って。元にもどってから、わたしが生きているのって、咲のひぎのうえじゃ!?

「ええと ベ、べつに、なんでもないです」

店員さんが、ぶんぶん頭振ってるわ。顔も赤くなってる。これ、まさか

「いや、ちょ、ちょっとそれ、誤解だから!」

「いえ、その、私もなぎささんたちで見なれてるっていつか、あの 〆ちそうさまです」

おさがが跳ね上がるくらい頭上げて、足早にパンに向かう姿を見た瞬間、咲が立ち上がった。

ひざから投げ出されたわたしの手をとって、倒れないように前に押し出して。でも、無理にひっぱったりしない。なにがしたいのか、次になにをするのか、もうわかってるから

でも、

「ちよっと、待ってえっつ!!」

何も言わずにわかり合えるのがこれって、ちよつと情けないなあ

—おしまい—